

# vivo

水戸芸術館音楽紙[ ヴィーヴォ ]

7&8 JULY/AUGUST  
2003

## CONTENTS

フィオレンツァ・コッソット	.....1、2
トラフ・ドゥ・ハイドゥークス	...2~4
日本のうたセミナー 第3期	.....4
[Portrait]あひるの会合唱団	.....5
オルガン名曲ライブラリー	.....5
最近の公演から	.....6
ネタマ& petite 情報	.....7
インフォメーション	.....8



トラフ・ドゥ・ハイドゥークス



左:フィオレンツァ・コッソット  
右:呉恵珠



## 数々の伝説をその身にまとった、偉大なる名歌手の登場。

7/27(日)フィオレンツァ・コッソット メゾ・ソプラノ・リサイタル

今年の水戸芸術館コンサートホールATMIは、「歌の年」と形容してもいいかもしれません。4月には『オペラの花束をあなたへ』で佐藤美枝子、井ノ上吏、大島幾男という3人の名歌手が揃い踏みを果たしました。ことに佐藤美枝子のドリーブラクメ から 鐘の歌 の驚異的な名唱は満場の喝采を浴びました。5月にはアンネ・ソフィー・フォン・オッターが登場、現代における歌曲解釈の最前衛を、鮮やかなステージ・パフォーマンスと共に印象づけました(両公演の詳しいレポートは ページをご覧ください)。そして、フィオレンツァ・コッソット。この14年、さまざまな名歌手がコンサートホールATMIに登場してきましたが、なんと意外なことにイタリアの名歌手が出演するのは、これが初めてとなるのです。さっそく、この偉大なプリマをご紹介しましょう。

フィオレンツァ・コッソット、その肖像

と言っても、1970年代からの年期の入ったオペラ・ファンの方々は、筆者よりもはるかにコッソットのことをよくご存知でしょう。1935年生まれのコッソットは、70年代、NHKが招聘したイタリア・オペラ団の一員として3回来日し、絶頂期を迎えていた

その声を日本の聴衆の前に存分に披露しているからです。

コッソットの声種はメゾ・ソプラノであり、かつてオペラにおいては、主役級の役割を受け持つことが多いソプラノやテノールの、脳にまわりがちな立場でした。しかしコッソットは、25歳年上の名歌手ジュリエッタ・シミオナートと共に、オペラにおけるメゾ・ソプラノの役割(たとえば アイダ におけるアムネリスなど)の存在感を、歌唱面においても演技面においても、かつてないほど高めることに成功したのです。

評論家の國土潤一氏は、コッソットについて、シミオナートがメゾをプリマ・ドンナ・ソプラノと互角の存在にしたならば、コッソットはロッシーニ以来初めてメゾをプリマ・ドンナとした歌手、と表現した後、彼女の業績を次のように形容します。少し長くなりますが引用しましょう。

「コッソットの玲瓏とした声の冴え、ことにその声のどの音域においてもまったく雑音を混入させぬ完璧な発声技術は、少なくとも今世紀(註:この文章が書かれたのは1993年)のメゾのなかでは随一の存在であった。深く鋭い低声は、カラスがマリブラン(註:カラスはもちろんマリア・カラスのこ

と。マリブランは19世紀初頭の名歌手マリア・マリブラン)の魂を求めて模索した声でもあったが、コッソットは、結果的に、カラスですら成し得なかったこの声を、現代的な知性と技術によって、ついに具現した。この低声の威力と、ソプラノと見紛うばかりに輝かしい高声、そして、それを見事に給ぶ充実した中声を武器に、コッソットは全身全霊を込めた激しい役作りの舞台を展開した(以上、『クラシック音楽の20世紀 オペラの時代(音楽之友社)』からの引用)

マリア・カラス。この大歌手が引き合いに出されているのは偶然ではありません。コッソットは12歳年上のカラスと同時代を生き、22歳のときの初共演であるベッリーニ: 夢遊病の女 をはじめ数々の舞台を共にしたのです。奇しくもカラスの引退興行となった65年パリ・オペラ座でのベッリーニ: ノルマ でも、コッソットは共演していました。彼女はカラスから多くのものを吸収し、マントの翻し方といった舞台上の所作もつぎに見て学んだということです。

しかしもちろん模倣だけで名歌手が誕生するはずもありません。天性の能力と努力、そして次の発言に聞かれるような強靱な意志こそが、彼女を

スターダムへと押し上げたのでしょう。これは、彼女が決定的な成功を収めた61年ミラノ・スカラ座公演の思い出です。このとき、彼女は急病でキャンセルとなったシミオナートの代役を急務務めたのです。

「リハーサルでくたくたになって家に戻ったら、支配人から『20分で劇場に来い』と電話。劇場では『シミオナートに代わってコッソットが出演します』というアナウンスで、観客の『オーツ』という失望のため息でしょう。二十歳の小娘だった私は、負けるものかと思いましたよ」(2002年7月30日、徳島新聞に掲載されたインタビューから)

コッソット絶頂期の歌唱を聴くには、以下の2枚のアルバムが入手し易いでしょう。まず62年にミラノ・スカラ座で録音された、まだ20代、「昇り竜」のコッソットが聴けるヴェルディ：トロヴァトーレの録音。もうひとつは、74年、まさに脂の乗りきった時期に録音されたヴェルディ：アイダの録音(本稿末尾のCD紹介の欄をご覧ください)。これらには、今回のリサイタルでも歌われる曲が含まれています。

しかし、60年代から90年代まで第一線に立ってきたとはいえ、もう68歳、往年の声量を今回のリサイタルでそのまま聴かせることは難しいのではないかとと思われるかもしれません。それはある意味で事実でしょう。しかし、マリア・カラスが引退後、晩年に復活してディ・ステファノに行ったツアーが、声量の多寡を超えて多くの人々の心を打ったように、コッソットも今、表面的な華やかさを超え

到達した音楽の精髓を、メッセージとして届けようとしているのです。事実、昨年行われた来日ツアー(今回と同じく、呉 恵珠が彼女の伴奏を務めています)は、単なる賞賛を超えた深い感動の声を集めていました。彼女のそのときのインタビューをご紹介します。

「仮に今、老いて声が出なくなったカルロー(註:20世紀初頭の大テノール歌手、エンリコ・カルロー)が舞台上にいるとしましょう。そこで彼が何も『表現』できないと思いますが、人間の真実を伝えるのは表面的な声量ではない」「年を重ねるとは、成熟するとはどういうことなのか。今の私の歌を通じ、若い世代に音楽する意味をじっくり考えてもらいたい」(2002年7月27日、朝日新聞夕刊に掲載されたインタビュー)

モーツァルトやロッシーニに始まり、日本歌曲、そして彼女が舞台上で数多くの名演を聴かせてきたチャイコフスキイ、ドニゼッティ、マスカーニ、そしてヴェルディの名アリアで構成されたコッソットのリサイタル。それは、音楽のみならず、人生を、人間そのものを聴く音楽会となることでしょう。

水戸市南町連合商店会の協力を得て

今回のリサイタルは、水戸市南町連合商店会の後援をいただき開催されます。これは、南町二丁目がポーロニヤの商店街と友好関係にあることから発案されたものです。夏になれば、コッソットのチラシやポスターが南町のお店を飾ることでしょう。リサイタルのチケットがサマーセール品の

目玉になるそうですよ!そして演奏会の夜18:00からは、南町のイタリア料理店「ドンピッコ」にて、コッソットさんを囲むパーティが行われます(問い合わせは同店 TEL029-225-1400まで)。演奏会の感動の後、夕暮れ時の水戸の街をゆっくり歩き、ピッツァやワインに舌鼓を打ちながらコッソットさんに会う…。優雅な夏の休日を、ぜひこの演奏会と共にお過ごしください!《矢澤》

#### 【コッソットのアルバム】

ヴェルディ：歌劇 トロヴァトーレ



セラフィン指揮ミラノ・スカラ座管弦楽団、合唱団、ベルゴンツィ(T)、ステッラ(S)ほか [ドイツ・グラモフォンPOCG-30103/4]

ヴェルディ：歌劇 アイダ



ムーティ指揮ニュー・フィルハーモニア管弦楽団、コヴェント・ガーデン王立歌劇場合唱団、カバリエ(S)、ドミンゴ(T)ほか [EMI TOCE-9131/32]

## ルーマニアから、未知の超大型音楽台風襲来！ 8/24(日)タラフ・ドゥ・ハイドゥークス

緑の葉、すみれの花

遠い昔、紀元800年のこと、何が起こったのかわかるかな？ ツィガーヌが何をしたのかな？ 彼らはあちこちから旅立ち、そしてクレジャニに着いたのさ

クレメルも葉加瀬太朗も蒼さめるすさまじいヴァイオリンの早弾き。ピアソラが何人もいるかのようなオーケイション。打楽器と化しアンサンブルを煽り立てるツィンパロムとコントラバス。そして振り絞るような歌声によって歌われる、喜びや愛、そして怒り。90年代に世界のミュージック・シーンに登場するや否や瞬く間に旋風を巻き起こした、

ルーマニアはクレジャニ村を本拠とするバンド、タラフ・ドゥ・ハイドゥークス。引用したのは、その最長老メンバーであったニコラエ・ネアクシュ(昨年逝去)が歌うバラードの一節です。彼がこのバラードを歌う様子は、タラフ・ドゥ・ハイドゥークスとその活動を活写したDVD「タラフ・ドゥ・ハイドゥークス」の中で見ることができます(訳詞はブックレット記載のものを引用)。ここで歌われている「ツィガーヌ」とはいわゆる「ジプシー」の名で呼ばれていた民族、ロマ族のこと。ロマ族の誇り高き楽士たちであるタラフ・ドゥ・ハイドゥークスが、彼ら民族の出自と歴史について歌うのが、このバラードなのです。

ロマ族(ジプシー)について、私たちは何を知っ

ているでしょうか？ヨーロッパの各地に散在する「流浪の民」というイメージこそ抱いていても、彼らがどこからやってきたのか、どんな民族なのか、あまり詳しくは知りません。ヨーロッパでもかつては同じような認識だったらしく、それは「ジプシー」という呼び名に象徴されています。ジプシーとは「小エジプト(現在のギリシャやキプロスあたり)の民」といった意味で、彼らはこのあたりの出自として考えられていたのです(ちなみにこの名はロマの人々にとっては蔑称であり ツィガーヌ、ボヘミアン等も同じ。現在では積極的に用いられません)。タラフ・ドゥ・ハイドゥークスについて語るには、その音楽の、説明無用の迫力と楽しさとはともかく、この、ロマ族の知られざる歴史について簡



タラフ・ドゥ・ハイドゥークス

単に振り返る必要があります。

現在では、ロマ族は北部インドをルーツとするのが定説となっています。彼らがそこから移動しはじめたきっかけは、紀元前420年頃、イランの王によって1万人のロマ族が音楽家あるいは踊り手として連れてこられたことだとされています。その後ずっと時代が下って9世紀にはイランにその多くが移り住み(ニコラエのバラードに歌われている通りですね)11世紀にはブルガリアあたりに登場、15世紀にはヨーロッパ各国に姿を現すようになりました。こうした移動には、当時勢力を誇っていたトルコが大きな役割を果たしています。つまり楽人としてトルコの人々に仕え、連れまわされた彼らは、トルコのヨーロッパ侵入に伴って必然的にヨーロッパの地に足を踏み入れることになったのです。そしてトルコを逃れてヨーロッパ諸国に入ったロマの人々にも、安息はありませんでした。たとえればルーマニアでは15世紀から19世紀までロマの人々はほぼ奴隷状態にあり、トルコやロシアと戦う際には前線に駆り出されたとのこと。このようなロマの辛い境遇は、ニコラエのバラードの続きで、次のように歌われています。

マキエシの一族の中で一番悪賢い奴が  
マリの一家を連れ去り、  
金持ちのところに行き、トウモロコシと妻と引き替へ  
に、このツィガーヌたちを  
売り渡したのさ。  
おお、兄弟よ、聞いたかね!  
ただのトウモロコシと妻のために売られたのさ。

ロマ族の苦難はルーマニアに留まらず、どの国でも似たようなものでした。彼らはよそ者として差別され、酷使され、時に迫害の憂き目にあいました。たとえばナチスドイツが第二次世界大戦中、ユダヤ人と共に、ロマの人々を何十万人と虐殺したことは、その悲惨な例のひとつです。

しかし彼らには、音楽という大きな力の源がありました。それは彼らの楽しみであり心の慰めであり、また生活の糧でもありました。ニコラエのバラードは続きます。

さて兄弟よ、そのツィガーヌたちは  
何をしたと思うかね?  
彼らは子供をたくさん作り、  
次の世代がやってくる、子孫たちは  
楽器を甞めたのさ。  
兄弟よ、その子らはヴァイオリンや

コントラバスやコブザを持って金持ちの家に行き、  
演奏したのさ  
彼らは金持ちの奴隷だったのさ。

さて、俗に言う「ジプシー音楽」とは何を指すのでしょうか。ジプシー・ヴァイオリンとかジプシー・キングスとか、なんとなく漠然としたイメージはあるのですが、「ジプシー音楽の定型とは何か」と問われても、明確な答えは思いつきません。同じ「ジプシー起源」といっても、いわゆるハンガリーの「ジプシー音楽」と、スペインのフラメンコではずいぶん違います。その問いに明確な答えを与えてくれるのが、トニー・ガトリフ監督の映画『ラッチョドローム』(ロマニー語で「よい旅を」の意味)でしょう。この映画は、インド、エジプト、トルコ、ルーマニア(ここで登場するのはもちろんわれらがタラフ・ドゥ・ハイドゥークス)、ハンガリー、スロヴァキア、フランス、スペインの8か国に住むロマの人々の音楽と踊りを半ドキュメンタリー的に紹介していくというもの。こうして各地のロマの音楽を並べて聴いてみると、互いにまったく異なることがわかります。違う言い方をすると、ロマの人々は、それぞれが移り住んだ土地の音楽を巧みに吸収し、独自のスタイルの音楽を作り上げてしまう、ということになるのでしよう。しかし不思議なことに(それはガトリフのみごとな演出と編集の力でもあるのですが)、距離的にもっとも離れているインドのラジャスタンのロマと、スペインのロマたちの音楽ですら、どこかで共通しているように聞こえるのです。踊りと一体となった卓抜なリズム感とか、どこか哀愁の影さす旋律とか、いろいろな要素がそう感じさせるのですが、何より、音楽と踊りがその生において単なる気晴らしを超えた「命の糧」であるところに、時空を超えて響きあうロマたちのスピリットの核がある、ということなのでしょう。話が少しそれますが、このガトリフの映画は、撮影が実に美しいことと、ナレーションをいっさい使わずに歌と踊りだけでロマの歴史をおのずから物語らせるというみごとな語り口によって、忘れ難く感動的な映像詩となっています。今回のタラフ・ドゥ・ハイドゥークスの演奏会の前、8月2日(土)にACM劇場にてこの映画の上映会(水戸短編映像祭で気を吐く「NPO法人シネマパンチ」との共催企画)を行いますので、ご覧いただくと、本編の演奏会もまた一段と感慨深いものになるのではないでしょうかと。

本題に戻りましょう。各地の音楽のエッセンスを食欲に消化吸収しつつ、ロマの独自性、誇りを失

わない彼らの音楽は、その土地の人々をも魅了し、彼らとの(たとえ東の間であれ)心の交流すら果たしてゆくのです。ニコラエのバラードのしめくくりは、こんな風に歌われます。

それでも終いには、毎日曜日が来ると、  
彼らツィガーヌは着飾って祝祭に行き、  
音楽を歌い、演奏するようになったのさ。  
ツィガーヌもルーマニア人も一緒に、  
楽しむようになったのさ。(以上、向風三郎氏の訳)

さて、こうして話題はタラフ・ドゥ・ハイドゥークス本体にたどり着きました。ルーマニアの寒村クレジャニに定住し、活動していたロマの音楽家たち、タラフ・ドゥ・ハイドゥークス(義賊たちの楽団)が西側で有名になったのは1990年代、ベルギーのレコード会社が彼らの録音を紹介し、上述の『ラッチョドローム』によってその姿がフィルムに焼きつけられてから。なぜ彼らがそれまで有名にならなかったかといえば、それは独裁者チャウシェスク時代の閉じたルーマニアの社会体制のせいにはなりません。党と社会主義のために無理矢理奉仕させられていた楽士だった彼らは、しかし「ハイドゥーク(ルーマニアの伝承にある、悪い金持ちや役人から財宝を盗み、貧しい人々に分け与える義賊のこと)」の魂をしぶと持ち続けていました。封印されてきたパワーは、チャウシェスク体制の崩壊と共に解き放たれたのです。世界各地で演奏し、その地で出会ったロックやジャズをどんどん吸収し、アルバムごとにパワーと迫力を増す彼らの音楽を、「もはやクレジャニ村の伝統音楽ではない」とする見方も可能でしょう。しかし世界中の音楽と難なく同化し、それをいつのまにか自分たちのサウンドに変えてしまいうま音楽のスピリットのことを思えば、タラフの音楽はまさしくリアル・ロマ・ミュージック、ハイパー・ロマ・ミュージックと呼ばれてしかるべきなのです。

自由に生き、語り、音楽することができる喜びを、ニコラエ翁はチャウシェスクを批判する名曲独裁者のバラードでこう歌い上げます。

緑の葉よ、千の葉よ  
この22日という日に  
時は戻ってきた  
俺たちもまた生きられる時代が  
兄弟よ、公明正大に  
自由に生きるがいい。(栗田 洋氏の訳)



昨年、パリ公演の折、当時78歳だったニコラエは突然「わしはもうすぐ死ぬ」と言って周囲を驚かせたそうです。まだ元気なの！？と訝る周囲を尻目に、ニコラエはもう最後だから、独裁者のパレードの滅多に歌わないロング・ヴァージョンを歌わせてくれ、と言ったとのこと。超絶的な名唱で聴衆を圧倒したのち、クレジャニ村に帰ったニコラエは数日後眠るような大往生を遂げたのです。まるで自然の懐に帰る時期を知っていたかのようなニコラエの不思議なエピソードも、音楽と共に、親から子へ、子から孫へと自らの生のバトンを手渡していくクレジャニのロマの人々にとっては、ごく当たり前のことなのかもしれません。ニコラエ(1ページ目の写真の最前列でクールにヴァイオリンを構えているおじいさん)はもういませんが、ハイドゥクスたちの魂は、若きヴァルトゥオーソ、カリウをはじめとする凄腕メンバーたちによって、より強く、たくましく鍛えられ受け継がれているはず。8月24日、水戸にやってくる彼らのライブは、きっと一生忘れられない興奮と感動を タラフの音楽を聴いていると、こんな言葉を平気で使ってしまうのです 私たちに与えてくれるに違いありません。噂では、コンサートが終わった後ロビーに出てきて聴衆にどンドンサインしまくったり、興が乗ればその場で弾いちゃったりする人たちがらしいとのこと。そんな人間くさい義賊たちと、彼らの、

世界にふたつとない音楽に会いに、ぜひおいでください!!《矢澤》

タラフ・ドゥ・ハイドゥクスを知るための  
ディスク&書籍ガイド(上・写真参照)

CD『タラフ・ドゥ・ハイドゥクス』

(ワーナー-WPCR - 19033)

\*彼らの音楽のエッセンスを体験できるベスト盤。コンサート前の予習用として必携! 独裁者のパレードトルクェアスカ など定番収録。

CD『バンド・オブ・ジブシース』

(ワーナー/ノースウエストAMCY - 19033)

\*フカレストでのライブ盤。ジミ・ヘンドリックスのバンドにひっかけ、あえて自分たちを「ジブシー」と呼ぶ、この余裕。これを聴くとわかるのですが、コンサートは思い切り盛り上がりで大丈夫です(踊ってもOK)。マケドニアのコチャニー・オルケスターという破天荒なブラスバンドも共演しています。

DVD『タラフ・ドゥ・ハイドゥクス』

(パップ VPBUE - 11030)

\*1996年にフランスのテレビ局が作ったドキュメンタリー。タラフ一行のクレジャニ村での日常やツアーの様態を活写。クレジャニに行きたくなります。向

風三郎氏の解説もすばらしく、本稿を書くにあたって多めに参考とさせていただきます。

CD『クロノス・キャラバン』

(ワーナー WPCS - 10499)

\*現代音楽の雄、クロノス・ヴァルテット(水戸にも来ましたね)とトルクェアスカで共演。あの凄腕集団クロノスが、はっきり言って押されてます!

書籍『バルカン音楽ガイド』(関口義人著・青弓社)

\*タラフを含む、知られざるバルカン音楽の全貌を明らかにする好著。これも本稿を書くにあたって、多めに勉強させていただきました。

\*『ラッチョ・ド・ローム』のDVDも出ていますが(ブロードウェイ BWD - 1139)、できたらまずACM劇場の大スクリーンで堪能してからお求めにされるのがよいかと。ちなみにタラフに惚れ込んだ俳優ジョニー・デップは自ら主演した映画『耳に残るは君の歌声』のサウンドトラックにタラフを起用しています。

## 和やかに、熱心に日本歌曲を学ぶ。日本のうた セミナー、3年目がスタート。 8/3(日)畑中良輔の日本のうた セミナー第3期 第1回「平井康三郎 Ⅱ」

日本歌曲の愛好家の皆様をお待たせしました。「畑中良輔の日本のうた セミナー」の第3期が8月3日(日) 15時はスタートします。毎回ひとりの作曲家にテーマをしぼり、講師・畑中良輔がその作品の真髄に迫るレクチャーを展開します。これまで当セミナーでは山田耕筰、信時潔、弘田龍太郎、橋本國彦、平井康三郎の作品を研究してきました。

第3期では、平井康三郎、別宮貞雄、中田喜直の3人を取り上げます。平井作品については、昨年度の最終回で、彼の代表作である歌曲集「日本の笛」を研究しました。しかし、平井康三郎には、このセミナーで取り上げた1歌曲がまだたくさんあります。草城山 九十九里浜 ゆりかご など、日本の笛に至る以前の1930年代の平井作品にも、純粋な旋律美に溢れる優れた曲が多

く残されているのです。今期の第1回(8月3日)では、そした平井の珠玉の名品を取り上げます。

第2回以降、時代は戦後に入ります。第2回(10月19日)で取り上げる別宮貞雄の歌曲集「淡彩抄」(1948年)、第3回(2004年1月18日)中田喜直の歌曲集「六つの子供の歌」(1947年)は、2人の作曲家としての出発点となった曲。同時に、戦後日本歌曲史の始まりを告げる曲のひとつでもあります。講師の畑中良輔も、別宮、中田とともに、戦争によって荒廃した音楽界の復興に努力を尽くしたひとりでした。同時代を生きた畑中が当時を振り返りながらどのようなレッスンを展開させるのか、大変興味深いところです。第2回、第3回はこの2つの歌曲集を中心に展開する予定です。第3期を通してお越しいただければ、「戦前から戦後へ」という時代の日本歌曲の流れをつかんで頂

けることでしょ。

まだ一度もセミナーにお越しになっていない方もご心配なく。今期第1回ではこれまでの復習の意味をこめて、歌唱の基本となる呼吸法・発声法の練習をいつもより時間をかけてレクチャーする予定です。もちろん客席全員参加。そして、毎回レッスン後に聞くミニ・コンサートのゲストには、これまでも水戸芸術館で幾度となく名唱を聴かせてくれた中澤桂(ソプラノ)が登場します。

日本歌曲の歴史。それは日本の作曲家たちが、西洋音楽である「歌曲」と日本の伝統文化との融合を探究してきた軌跡であるといえるでしょう。私たちは彼らの探究を体験するように1曲ごと、じっくりと研究していきます。第3期もどうぞご期待下さい。《松田》



写真左から、畑中良輔  
あひる会合唱団

## Portrait

# あひる会合唱団、53年間の確かな歩みの結実です。 7/6(日)あひる会合唱団演奏会

## Portrait

初夏を思わせる明るい陽射しと暖かい風の吹く五月下旬、あひる会合唱団の常任指揮者である鈴木良朝さんに水戸芸術館にお越しいただいた。鈴木さんは53年にわたるあひる会の歴史のうち、実に48年間同団を指導されてきた。今回は、7月6日に水戸芸術館コンサートホールATMで行う演奏会のお話を伺った。

あひる会のレパートリーの主軸となっているのは、ルネサンスやバロック期の宗教曲を中心としたポリフォニー音楽。今回も第1ステージをアルカデルト、ビクトリア、シュッツの作品で構成する。「今から三、四十年前になりますか。『合唱の基本はア・カベラだ！ア・カベラをやるならルネサンス音楽だ！』と団員に声をかけたのです」最近でこそ、こうしたポリフォニー音楽を取り上げる合唱団は珍しくないが、当時としてはあひる会合唱団は稀有な存在だったろう。「何しろ今と違って輸入楽譜がなかなか手に入らない。昔はよく銀座のヤマハに行って、輸入楽譜棚の前で延々5時間、めぼしい楽譜を探していたものです」それに当時の楽譜には歌詞の英訳さえ載っていない。「『意味が判らない』では歌えなし。大学で習ったラテン語の知識を

もたに、それは必死に辞書引いて調べましたよ。でも、今だって同じです。外国語の曲をやるときは必ず私は逐語訳表を作って団員の皆さんに配るんですよ。そうした努力が現在のあひる会の土台となっているに違いない。

第2ステージの千原英喜の「おらしょ」は、そうしたルネサンス期の宗教曲に取り組んできた過程の延長上にあるという。「カクレキリシタン」に伝わる歌を題材にした曲です。ここでは「kyrie eleison(主よあわれみたまえ)」などの典礼文が『きりあれず』と読み替えられたりするわけですが、あひる会でこれまでやってきたラテン語の知識を生かしたい」

後半のステージは、今年3月の「合唱セミナー2003」で講師を務めた松下耕による編曲でさだまさしのフォーク・ソング集。「このステージは菅波ひろみさんが指揮します。歌謡曲なので楽しんで聴いてもらえればいいのですが、松下さんの編曲が独特でなかなか難しいんですよ」と鈴木さん。

そして、最後のステージは「世界合唱名曲」と銘打ち、ハイドン 四季 から「来よ、のどけき春」、ドヴォジャーク スタバト・マテル から

「慈しみの泉なる母よ」、ボロディーの歌劇「イーゴリ公」から「鞆鞆人の踊り」の3曲を演奏する。鈴木さんはこのステージに込めた願いを語ってくれた。「これらの曲はとてもいい歌で、昔はよく歌ったものなのですが、最近はあまり聴かれなくなりました。これでは寂しいと今回取り上げたのです。こういう名曲はあひる会だけでなく、もっと色々な合唱団の人たちが集まって、一緒に歌えるようになればいいですね。合唱をしている人なら誰もが歌えるという曲が増えれば、合唱の輪はもっと広がっていくと思うのです」。満面の笑みを浮かべて語られる鈴木さんからは、あひる会とともに茨城の合唱界の発展を願う想いがひしひしと伝わってきた。最後に演奏会に向けての抱負を伺った。「私たちはアマチュアなので、決してパーフェクトな演奏はできないけれども、私たちの『意気込み』だけは伝えたい、そんな想いです。」「松田

## お馴染みのプロムナード・コンサートで新シリーズが始まります。

8/30(土)パイプオルガン・プロムナード・コンサート 夏休みスペシャル・プログラム  
「オルガン名曲ライブラリー」 第1回 J.S.バッハ

週末の午後にお楽しみいただいている「パイプオルガン・プロムナード・コンサート」。その枠内でゴールデン・ウィークやクリスマスなどの特別プログラムや様々な器楽や声楽が登場する「ヴァリエーションズ」公演といったスペシャル演奏会を開催してきています。そして今回、そうしたプロムナードの「スペシャル」布陣に、また新たなシリーズが加わります。その名は「オルガン名曲ライブラリー」！これだけは是非お聴きいただきたい！というオルガンの名曲を厳選し、お届けするシリーズです。しかも、各回は作曲家や地域(ドイツ、フランスなど)、作曲された時期(バロック期、古典期、近代など)などの観点か

らテーマを設けて実施しますので、このシリーズに足を運ばれば、とても効率よく、古今東西のオルガン音楽の全貌をつかんでいただくことができます。

記念すべき第1回のテーマは、やはりこの作曲家!「J.S.バッハ」!しかも、誰もがご存知のあのトッカータとフーガ 二短調BWV565で幕を開けたいと思っています。続くプログラムは、トリオ・ソナタ 第5番BWV529、ファンタジア ト長調BWV572、コラール 我が魂は主をほめまつる BWV733。出演は、1999年ツェル・ニーダーザクセン国際オルガニスト・コンクール、2000年北ドイツ放送局音楽賞国際オルガ

ン・コンクール共に優勝の実績をもつ高橋博子。プロムナード・コンサートにもたびたび出演している彼女は、これまでにJ.S.バッハが弾いたというハンブルクの聖ヤコビ教会やリューベックの聖ヤコビ教会での演奏などヨーロッパ各地でも演奏活動を行っています。高橋のバッハ演奏にどうぞご期待ください。なお、オルガン名曲ライブラリー のJ.S.バッハ特集は第2回目も計画中です!【中村】

## 最近の公演から

APRIL  
MAY



1



2



3



4



5



6



7



8

オペラの花束をあなたへXV  
華麗なるアリアの宴& 椿姫 ハイライト  
(4月19日)

オペラの魅力を畑中良輔のご案内で紹介する「オペラの花束をあなたへ」シリーズの第15弾。今回は、これまでの実績を踏まえて、イタリアとフランスのオペラから特に人気の高いアリアでプログラムを構成した。第1部の「オペラ・アリア・アルバム」。水戸芸術館初登場となるテノール井ノ上了吏の力強い第一声から、否応なく今宵への期待がふくらむ。続くバリトン大島幾雄は重厚な歌声と円熟した心理描写で聴衆を圧倒。そして、7年ぶりの登場となったソプラノ佐藤美枝子のしなやかなコロラトゥーラの妙技! 第1部はそれぞれのキャラクターが存分に発揮されたステージとなった。第2部は「椿姫 ハイライト」。乾杯の歌、ああそれは彼の人か、プロヴァンスの陸と海…3人の歌い手による名唱・名演技の連続に、終幕に向けてステージのヴォルテージが高まる。ヴィオレッタが最期を迎えるラストシーン、谷池重紬子の弾くピアノが止むと間髪なく、彼らの歌声に応える、大きく素晴らしい拍手が鳴り響いた。《松田》

アンケートから 先日、ヨーロッパを外遊してきました。ウィーン、パリ、リヨン、バルセロナで気軽にオペラやバレエを鑑賞できて、うらやましく思いながら帰国しましたが、水戸もなかなか負けていませんね。高水準のガラ・コンサートを楽しむことができました。(水戸市:S.E.さん) ソプラノの佐藤さんの声が良かったです。テノール、バリトンの方の声も良かったです。オペラは初めて聞きましたがとても良く、今度も、ぜひ、聴きたいと思っています。(水戸市:S.I.さん、中学生の方です) とてもすばらしかったです。前半のアリア、ラウカを聴いて大感激。3点F、E(女声の高いミとファの音のより1オクターブ上の音)がどうしてあんなにすてきに出せるのか…。pからfまでの表現力、言葉ではあらわせないくらいすてきな美枝子さんでした。後半は3人も力量発揮で抜粋とはいえずとても充実したオペラでした。また、ぜひ次回もきたいしています。(結城郡:K.W.さん)

アンネ・ソフィー・フォン・オッター  
メゾ・ソプラノ・リサイタル(5月2日)

スウェーデンが生んだ世界的歌姫の3度目の来日にして初のリサイタルということで大変に注目が集まった今回の公演、いかがでしたか? プログラムの前半は北欧歌曲で、ラーション、アルヴェンなどオッターの母国の作品数曲のあと、シベリウスのピアノ小品を2つはさみグリーグの歌曲集 山の娘 で前半のクライマックスを築くという流れ。後半は一転ドイツものとなり、シューベルト、マーラーで張り裂けんばかりの緊張感を持続させ、高めた後、ヴァイルでふと肩の力を抜きながら、しかし真

実を歌うという見事なプログラムでした。オッターの歌の素晴らしさについては、館長・吉田秀和が5月22日付朝日新聞夕刊「音楽展覧」で触れていただきますのでご一読を。アンコールは、ヴァイル: マイシツプ、ビゼー: カルメン よりセギディーリヤ、ベニー・アンダーソン: ライト・アズ・サマー・バタフライの3曲(最後の曲は、スウェーデンが生んだ人気グループ、アバの曲とのことです)《開根》アンコールから ばらの騎士 のオクタブィアンを見て感動したわけですが、このホールでのリサイタルでは彼女の円熟ぶりを感じて、さらに感激しました。(土浦市:H.Y.さん) 日頃の雑事に追われる中、素晴らしいひとときを過ごせました。特に後半は素晴らしかった。音楽の力の偉大さを痛感しました。(水戸市:T.M.さん) 以前はケルビーノのようなボーイッシュな感じて、声質も鋭角的な感じがしましたが、今回久しぶりに聴いて、その変化に驚きました。まず貴婦人のような雰囲気。それに声に丸みが出てきて、成熟感がある。またリートに不可欠の「語り」がうまいということです。言葉が100%分らなくても、歌を聴いていると大意が伝わってくるような印象を受けました。(水戸市:S.E.さん)

「茨城の名手・名歌手たち 第14回」  
出演者オーディション(5月11日)

前回から部門ごとに隔年開催となった本オーディション。今回は、「管楽器・打楽器・声楽・器楽アンサンブル」が対象でしたが、隔年開催により注目度がアップし応募が殺到、例年の2倍にあたる88件の申込をいただきました。当日は朝9時半から夜8時近くまでみっちり審査が行われ、参加者たちは日頃の練習の成果を存分に発揮していました。厳正な審査の末、選ばれた以下の10名と1組が、9月13日の演奏会に出演します。茨城が生んだ「名手・名歌手たち」をどうぞ暖かく見守ってください。《開根》

「茨城の名手・名歌手たち 第14回」演奏会

2003年9月13日[土] 18:00開演

司会:畑中良輔

出演(敬称略・受験番号順):

飯塚公美(クラリネット) 矢口幸一(トランペット)  
森田泰明(トロンボーン) 村上加奈(ユーフォニアム)  
清水知子、会沢明美、和泉純子、見角悠代、  
坪内友紀子(以上、ソプラノ) 小橋琢水(バリトン)  
アークトリオ(ピアノ:清水美和、ヴァイオリン:関口桂代、チェロ:宇野哲之)

応募総数 88

(管楽器 35 / 声楽 46 / 器楽アンサンブル 7)

審査委員(敬称略・五十音順)

青山恵子、岩井宏之、梶原征剛、杉木峯夫、  
畑中良輔(審査委員長) 南みつ子、三善清達



\*nettama=ネットワークする猫。タマ。  
芸術館のコンサートをサカナに  
いるんだとこへnettamaします。

## 「ツィンガレーゼ」

おいおい、まいいとなあ、担当Y君よ。タラフ・ドゥ・ハイドゥークスの紹介でえらく力んでお勉強の成果を書いているのはいいんだけど、じゃあ僕らがこれまで思い描いていた「ジプシー音楽」って幻想？ そこまで言わないまでもある一面にすぎないってこと？ 今回は、クラシック音楽における「ジプシー的なもの」をちょっと探ってみようと思ったんだけど、そうなるはずと意味が限定されてくるわけだね。18世紀や19世紀のクラシックの作曲家が「ジプシー音楽」って思い込んでいたのは、つまりハンガリーのジプシー音楽にほぼ限定されちゃうわけだ。そうすると、今回のこのコーナー、カッコつきのレポートになるなあ。つまり「クラシック音楽家が考えた」ジプシー風音楽「ご紹介!」ってわけだ。歯切れ悪いなあ。でもさ、ロマの人たちは移住した先々の土地の音楽をどんどん吸収して自分たちの音楽にしちゃったわけでしょう？ ならばクラシック音楽がいろいろんな民族音楽を吸収して豊かになっていった歴史も、それがしばしば誤解に基づく「収奪」であったとしても、あながち前世紀の遺物として否定されなくてもいいんじゃないかと。ここにここで言う「ジプシー音楽」はクラシック音楽にすくい込んだくさんのインスピレーションを与えてきたわけだし。で、ロマの人には悪いけれどここはその誤解と差別の歴史も「込み」で「ジプシー」の呼称を多用します。あらかじめご容赦を。

ではさっそく、大作曲家のジプシー風(ツィンガレーゼ)なるものを列挙してみよう。17-18世紀にかけてもいろいろ例はあるよう

けれど、代表的なところではやっぱりハイドン。ハイドンが務めていたハンガリーのエステルハージの宮廷では「ジプシー楽士」たちもしばしば演奏していたようで、ハイドンの音楽にはそれからインスピレーションを受けたと思しき「ツィンガレーゼ」という曲や「アルンガレーゼ(ハンガリー風)」の表記が見られる。ここで重要なのは「ハンガリー風」と「ジプシー風」の意味が重なっていることで、20世紀に至るまでクラシックの作曲家が陥る「ハンガリーの音楽=ジプシーの音楽」という図式がすでに登場しているということだ。ピアノ三重奏曲 ト長調 や ピアノ協奏曲 二長調 の終楽章が代表的。モーツァルトやベートーヴェンではあまり思いつかないけれど、これはハンガリー/ジプシー風と言えるかどうかかわらないけれど、ベートーヴェンの 弦楽四重奏曲第15番 の第2楽章中間部はハーディガーディの音が聞こえる民族音楽風だ) エステルハージ伯の館に滞在したシューベルトには ハンガリー風メロディー というピアノ曲があるし、有名な弦楽四重奏曲第13番 ロザムンデ や アルペッジョーネ・ソナタ にもハンガリー/ジプシー音楽の影響があるとよく言われる。ウェーバーにも ハンガリー風ロンドがあるが19世紀のハンガリー/ジプシー好きといえばリストとブラームスという正反対の立場に立つ作曲家2人にとどめをさすというのが面白い。ハンガリー生まれのリストはご存知ハンガリー狂詩曲 ほかがあるわけだが「ハンガリー音楽イコールジプシー音楽」と断じきった元凶でもある。ブラームスは若い頃ハンガリーのヴァイオリニストレメニーと演奏旅

行して影響を受けたのか大のハンガリー/ジプシー音楽好き、その成果は有名な ハンガリー舞曲集 に結実。今年のウィーン・フィルのニュー・イヤー・コンサートでアーノクールがワルツやポルカに ハンガリー舞曲 を混ぜたのは、なかなか暗示的だ。あとはピアノ四重奏曲第1番の終楽章も有名。ドヴォルザークにもジプシーの歌 がある。この世紀、小品もいろいろあるが有名なのはドップラーの ハンガリー田園幻想曲 とサラサーテの ツィゴネリルワイゼン(ジプシーの曲、の意味) だろう。

でこうした「ハンガリー音楽イコールジプシー音楽」という誤解の構図を粉々に打ち砕き、両者は別であることを証明したのが20世紀のバルトークとコダーイによるフィールドワークだった。この経緯およびその研究の意味については、吉田秀和賞を受賞した伊東信宏氏の著書「バルトーク」に詳しい。ちなみにラヴェルはバルトークの研究を知っていたらしいが、にもかかわらず「ハンガリー音楽イコールジプシー音楽」という前世紀の構図にあえて乗っかるような ツィガヌス を書いたのはなぜか。この本ではそのあたりに関する鋭い推理が展開されている。ほかに、もヨハン・シュトラウス 2世 における転換したレトリックの話と上質のミステリーのように面白い。ご一読をお勧めしますよ。



伊東信宏・著「バルトーク」中公新書

## 水戸芸術館友の会企画のお知らせ

### 第12回LD鑑賞会「ベラスとメリザンド」

極上の音響・映像システムと選りすぐられた世界の名演、そして音楽部門・関根哲也の名詞子でオペラの魅力をたっぷり楽しんでいただく人気企画「LD鑑賞会」。今回は第8回の「ヴォツェック 以来となる20世紀オペラ、ドビュッシーのベラスとメリザンド」です。ドビュッシー唯一の完成されたオペラであるベラスとメリザンド、その音楽史上での意義の大きさについては頻りに語られるもの、実際に聴く機会はまったにありません。ピエール・ブレーズ指揮、ペーター・シュタインの演出による名舞台で、この夢幻的な傑作にたっぷり浸るまとないチャンスです!  
ご案内:関根哲也(音楽部門学芸員) 日時:7月5日(土)13:30-16:30(受付は13:00から) 対象:友の会会員&同伴者1名(入場無料)  
会場:水戸芸術館会議場

## 水戸芸術館友の会企画のお知らせ

オルガンレクチャー・シリーズ10「オルガンで聴くピーターとおおかみ」  
かつて音楽部門のスタッフだったオルガニスト・室住素子さんによる、オルガン・レクチャー・コンサート。毎回凝った趣向でオルガンの魅力を楽しんでくれるこのシリーズの10回目、お題はプロコフィエフの「ピーターと



おおかみ です。原曲は音楽楽曲ですが、この回のために室住さん自身がオルガン編曲し、オリジナル台本を準備するという盛りよう。昨年の間宮芳生企画「ピーターとおおかみ」この聴き比べも楽しかったですね。かつて「ぞうのババール」という名物企画を誕生させた室住さんならではの仕掛けに期待が高まります。ご家族でお楽しみください。

出演:室住素子(オルガン)、光瀬名瑠子(台本構成・語り)  
日時:8月25日(月)13:30開演 料金:友の会会員無料/一般1,000円/小・中学生500円(当日受付) 会場:エントランスホール  
お問い合わせは水戸芸術館友の会事務局TEL029-227-8111まで。

## 専属楽団メンバー水戸および近郊に登場

6月27日(金)、ひたちなか市文化会館にMCOメンバー宮本文昭登場。2001年夏にラルフ・タウナーとの共演で芸術館に登場したギタリスト渡辺香淳美とのジョイント・リサイタルです。お問い合わせは同会場TEL029-275-1122まで。

7月12日(土)にはMCOメンバーの店村真穂が佐川文庫にてリサイタルを行います。プログラムはシューマン: おとぎの絵本、シューベルト アルペッジョーネ・ソナタ、ブラームス: ヴィオラ・ソナタ第1番を予定。お問い合わせは佐川文庫TEL029-309-5020まで。

## information

チケットに関するお問い合わせ

...水戸芸術館チケット予約センター / 029-231-8000

営業時間 / 9:30 - 18:00(月曜休館)

公演内容や企画に関するお問い合わせ

...水戸芸術館音楽部門 / 029-227-8118

【ATM便り】毎月1回茨城新聞に不定期登場。

NHK-FM水戸【FM水戸アップデート】木曜日18:15頃～15分ほど(不定期登場) 水戸周辺83.2MHz、日立周辺84.2MHz。

チケット・インフォメーション

6月28日(土)発売分

畑中良輔の 日本のおた セミナー 第3期

8/3(日) / 10/19(日) / 1/18(日) 各日14:00開始

料金(全席自由):1回券:¥1,500 第3期通し券:¥3,600

早島万紀子 オルガン・リサイタル

9/29(月)18:30開演 料金(全席指定):A席¥3,000 B席¥2,000

ヴェルサイユの舞踏会 パロッド・ダンス・プロジェクト

10/25(土)18:30開演 料金(全席指定):S席¥7,000 A席¥5,000

B席¥3,500

ペア・シート(S5席5組限定)¥12,000 水戸芸術館のみの発売です

7月5日(土)発売分

高山三智子 ピアノ・リサイタル

9/5(土)18:30開演 料金(全席自由):¥3,500

茨城の名手・名歌手たち 第14回

9/13(土)18:00開演 料金(全席自由):¥1,500

班目加奈 トランペット・リサイタル

9/14(土)16:00開演 料金(全席自由):¥2,500

佐藤 篤 ピアノ・リサイタル

10/18(土)16:00開演 料金(全席自由):¥3,500

これらの演奏会・残席情報

○...残席あり(20席以上) ...残席わずか(20席未満) x...残席なし 中央...中央ブロック 左右...左右ブロックおよびステージ裏 補助...補助席

あひる会合唱団演奏会

7/6(日)

...自由席

フィレンツァ・コソット メゾ・ソプラノ リサイタル

7/27(日)

...中央 x、左右、裏

タラド・ドゥ・ハイドゥークス 東欧義賊楽団

8/24(日)

...中央、左右、裏

6/8(日)現在の状況です。

公演当日に残席がある場合、開演1時間前より水戸芸術館チケットカウンターでお得な学生券を発売いたします。ご購入の際には学生証(記名章)をお持ちください。公開セミナーなど、学生券のない公演もございますので、予めお問い合わせ下さい。

固定席が売り切れ次第、補助席を販売いたします。

## 水戸芸術館の主な7・8月のスケジュール

コンサートホールATM

あひる会合唱団演奏会 7/6(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500

水戸市芸術祭 市民音楽会

7/12(土)18:00開演、7/13(日)13:00開演 入場無料

新荘小学校100周年記念式典&コンサート 7/20(日)13:00開演 入場無料

水戸市芸術祭 少年少女合唱会 7/21(月)14:00開演 入場無料

水戸市芸術祭 交響楽演奏会(茨城交響楽団)

7/26(土)18:30開演 料金(全席指定):S席¥2,000 A席¥1,500

フィレンツァ・コソット メゾ・ソプラノ・リサイタル 7/27(日)14:00開演

料金(全席指定):A席¥5,000 B席¥4,000 P席¥3,000

畑中良輔の 日本のおた セミナー 第3期 第1回「平井康三郎」

8/3(日)14:00開演 料金(全席自由):¥1,500

水戸市芸術祭 ジュニアオーケストラ演奏会

8/17(日)14:00開演 料金(全席自由):¥600 6/29(日)チケット発売

タラド・ドゥ・ハイドゥークス 東欧義賊楽団

8/24(日)16:00開演 料金(全席指定):A席¥4,000 B席¥3,000

エントランスホール

バイブルオルガン プロムナード・コンサート

7/5(土)13:30/15:00 7/12(土)12:00/13:30

8/2(土)13:30/15:00 8/10(日)12:00/13:30

8/23(土)13:30/15:00

夏休みスペシャル・プログラム 8/30(土)13:30/15:00 高橋博子

オルガン名曲ライブラリー J.S.バハ(1)

オルガンの名曲を作曲家ごとに紹介する新シリーズ

入場無料 演奏は各回20分程度です。

ACM劇場

水戸市芸術祭 パレエフェスティバル 7/21(月)14:00開演

料金(全席自由)¥500

水戸市民舞踊学校企画「ひとりでダンス」 7/27(日)14:00開演 入場無料

映画「ラッチョ・ド・ロム」上映会 8/2(土)16:00開映

水戸市芸術祭 市民演劇祭

脱高校演劇集団「くさぶえ」 8/8(金)19:00開演

劇団遊女舞台(ゆめぶたい) 8/9(土)14:00開演

演劇事務所 99 8/9(土)19:00開演

演劇集団「風ノ街」 8/10(日)18:30開演

茨城大学演劇研究会 8/15(金)19:00開演

劇団OH-NENS 8/16(土)12:30開演

オフィストゥー・ハッター 8/16(土)19:00開演

舞踊劇団「創(生まれる)」 8/17(日)17:00開演

料金等詳細につきましてはお問い合わせ下さい。TEL / 029(227)8111(代)

パルコ開演30周年 特別プロデュース作品

『WEE THOMAS / ウィートース』

8/30(土)19:00開演 7/19(土)チケット発売

現代美術センター

美術展覧会 第1期:日本画・洋画・彫刻・工芸美術

6/29(日)~7/11(金)9:30~18:00(入場は17:30まで) 入場無料

美術展覧会 第2期:書・写真・デザイン・インスタレーション

7/16(水)~7/27(日)9:30~18:00(入場は17:30まで) 入場無料

こもれび展 8/9(土)~10/5(日)9:30~18:00(入場は17:30まで)

入場料:一般¥800 前売/団体(20名以上)¥600 中学生以下、65歳以上、各種障害者手帳をお持ちの方は無料

休館日:月曜日

## 茨城の主な7・8月の演奏会

佐川文庫 TEL / 029(309)5020

佐川文庫ヴァイオリン・コンサート 店村真積 7/12(土)18:00開演

水戸市民会館 TEL / 029(224)7521

エレクトンフェスティバル2003 アンサンブルの部 茨城地区大会

7/21(月)14:00開演

日立シビックセンター TEL / 0294(24)7711

第1回 ひたちオペラ合唱団 OPERA NOSTRA公演

7/5(土)16:00開演

大宮町文化センター・ロゼホール TEL / 0295(53)7200

東京室内管弦楽団&神崎 颯(フルート)&妻 建華(二胡) 7/5(土)17:30開演

東海文化センター TEL / 029(282)8511

幸田聡子ヴァイオリン・リサイタル 7/12(土)18:30開演

ギター文化館 TEL / 0299(46)2457

日本の詩そして響き 三人の会 7/6(日)15:00開演

ボリス・ガケル コンサート 7/20(日)15:00開演

「ギターを愛する会」コンサート 8/17(日)13:00開演

パルホール TEL / 029(852)5881

塩田美奈子コンサート2003 7/5(土)19:00開演

龍ヶ崎市文化会館 TEL / 0297(64)1411

グランディ・パルティエ国際 Celebrate and Experience Japan Tour 2003

7/21(日)18:00開演

水戸芸術館音楽紙【ヴィーヴォ】 2003年6月発行 第91号

編集・発行/水戸芸術館音楽部門 〒310-0063 茨城県水戸市五軒町1-6-8

TEL:029-227-8118 FAX:029-227-8130

e-mail [ankrn@artowermi.or.jp] URL [http://www.artowermi.or.jp/]

編集/水戸芸術館音楽部門(五十音順):根根哲也 中崎美智代 中村 晃 馬場千恵

松田善幸 矢澤孝樹(編集長)

DTP / office west

印刷所 / 株式会社あけび印刷社

※次号は...名手・名歌手登場!

そしてフランス・オルガン音楽!